

の着ているこれが麻布の白です。左の人物の服も同じ白なんですが木綿の白です。同じ白ですが両者にはこのような違いがあります。木綿の白は喪服の白ではありません。喪主の白は、木綿の白とも違う漂白されない黄味がかった麻布の白です。この様に白といつても一様ではありません。白磁の白も一様でないことは言う迄もありません。

スライド②

これは農業です。ご覧のように色は白一色ではありません。五色の色があります。言う迄もなく、白と五色は両方とも韓国のシンボルカラーです。儒教は慎み深さを美德とし、佛者は白喪束を好みました。そして儒者のその清潔感と白磁の白色とが重なり、いつしか「白衣民族」と呼ばれるようになりました。また、平素は子供やシャーマン（スライド③）など、祭の時以外は、カラフルな服装に出会うことが無く、又戦前の不幸な時代は華やかな色を外に出すとしませんでしたから、宗悦はそれに出会わなかつたのでしょうか。また、白磁という造形、焼きものの肌に美しい白い花を咲かせたのも朝鮮王朝だとも事実です。



スライド③ シャーマン

今日は、朝鮮王朝の社会制度から、音楽・色・造形等を追って話を進めてきましたが、あれ程貧民として虐げられた人々が、何んであんなカラフルな服を着て、何んに躍動的に爆発し得たのだろうかということを外国人にはよく理解出来ないかも知れません。しかし、皆さんか、韓国へ一度旅をし、韓國の人々の喜怒哀樂のダイナミックな表現をご覧になると、理解出来ると思います。笑いと涙が一瞬に交錯することさえ珍しくありません。

（文責：友の会事務局）

プロフィール

金 両基氏
ケン ナンキ



1933年東京生れ、早稲田大学文学部卒業。哲學博士。現在、野口県立大学国際美術部教授。専攻・比較民俗学、比較文化、東洋演劇。昭和54年度芸術祭優秀賞受賞。ラジオたんぱ第1回アジア賞受賞。主な著書に「朝鮮の瓦能」(岩崎美術出版)、「ギムチとお糞番」(中公文庫)、「能の世界」(中公新書)、「韓国人が日本入る」(サイマル出版会)、「韓国伝統劇の世界」(新人物往来社)、「物語韓国史」(中公新書)など多数。

企画展の御案内

第25回企画展

中国陶磁シリーズ4

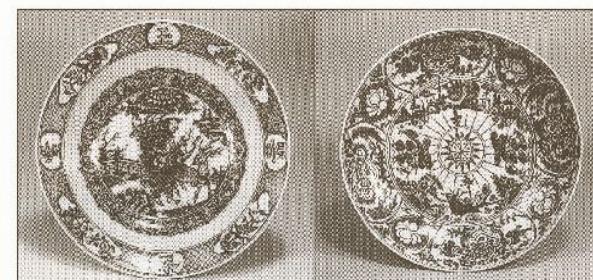
「呉須赤絵展」

会期：平成2年1月17日㈬～3月25日㈰

会場：当館企画展示室

■「呉須赤絵展」

呉須赤絵は明末清初（17世紀）に中国から東南アジアを中心に各地に輸出された独特のデリインの民窯瓷器です。日本では呉須赤絵と呼ばれ、欧米ではスワトウ・ワ工アと呼ばれています。呉須赤絵は日本にも数多く伝来し、非常に愛好され、日本の陶磁にも文様表現に大きな影響を与えました。香合や鉢などは茶人たるに珍重されました。呉須赤絵の多くは直徑30センチメートルを越す盤で、文様表現も多岐にわたりています。奔放自在な絵付けを特徴とし、花鳥文や帆船文、人物文、動物文、山水文などがあり、他の中国瓷器には見られないのびやかな線と人骨な色彩が特徴です。呉須赤絵は福建省南部から広東省にかけて焼造されたといわれていますが、はつきりとしたことはまだ分かっていません。本展では、東京国立博物館、静嘉堂文庫、出光美術館、五島美術館をはじめ、名所蔵家からお借りした呉須赤絵の代表的な作品約35点を展示致します。



編集後記

11月18・19日の2日間、東洋陶磁学会の第17回大会が、中之島中央公会堂で開催されました。今回のテーマは「近世都市遺跡出土の陶磁」。美術史・考古学など、様々な分野の方から盛んに意見が述べられ、この様子はNHKのニュースでも紹介されました。また、当時の研究発表にあわせ、当館企画展示室では、近畿各地出土の陶磁資料が特別展示され、皆さんが熱心に御覧になっていました。（N）

1989年12月15日発行(年4回) Vol.5-3(通巻18号)

大阪市立東洋陶磁美術館

友の会通信

ASSOCIATES NEWS

No.18

編集 大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局

発行 〒530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL.06(223)0055

美術館の舞台裏 (15)

1989年も、あとわずかで終ろうとしています。今年の企画展をふり返って、企画の方向づけの確認と、問題点を書き加えたいと存じます。第一に、海外の美術館の収蔵を紹介する企画展として、「シカゴ美術館中国美術名品展」がありました。同館の東洋美術部門がこのようなまとまった形で館外に紹介されるのはこれが初めてで、アメリカの美術館関係者にも好評を博しました。しかし同館には1,000点にも上るすぐれた中国の玉器のコレクションがありますが、玉器は日本ではあまり一般受けしないため、近く一部の紹介にとどめました。学問的な立場と同時に、観客動員という現実的立場も考慮なければ美術館の事業は進めて参れません。この場合も、すぐれた三器のコレクションを系統的に紹介できなかつたことが心残りです。第二に、最近の考古学の成果を取り入れた企画として「松山の茶陶展」がありました。近年の考古学的な陶磁器の調査の対象は、生産地のみならず消費地にも及んでいます。京都という1,000年の歴史を持つ大消費地から膨大な量の陶磁器片が出土していますが、その中から近世の茶陶に絞って、それを伝世の茶陶と比較対照できるように展示したものでした。陶片資料が主役をつとめる意味な企画でしたが、大きな反響を呼び起しました。その理由が、茶陶をテーマにしたからかどうか、私共としては見きわめをつける必要がありました。今後、陶片資料を中心とする企画展をどのように展開すればよいかを考える上で、重要なポイントとなるからです。第三に、現代陶芸を紹介する企画として「ルウェー・リリー展」がありました。日本ではほとんど知られていない作家ですので、大きな不安がありました。結果的には満足すべき成果を収めました。この場合も、三宅一生氏とのかかわりがどのように反映しているかを見きわめる必要があります。現代作家を取りあげる場合、どのようなアプローチをするべきかを考える上で、重要なポイントとなるからです。第四に、当館の専門分野の一つ、朝鮮陶磁シリーズ第14回の「李朝後期染付展」。このシリーズは、海外でも次第に評価されています。従って英文版図録の作成が必要となっていましたが、それにどう取り組むかが今後の課題の一つです。さて来年は、正日気分に満ちた「呉須赤絵展」から開幕します。どうぞよき新年をお迎えになりますように。

大阪市立東洋陶磁美術館
館長 伊藤郁太郎

◆第15回講演会要旨◆

「後期朝鮮王朝の社会制度 一作り手と文化遺産」

日時：平成元年10月28日㈯

午後1時半～3時半

会場：大阪弁護士会館 6階大会議室

講師：静岡県立大学教授 金 両基氏

只今ご紹介を頂きました金両基でございます。私は已生れの日本育ちの在日韓国人です。“私の本職或いは専門は何なが”と、自分で自問してみますが答えが出ない。そこで“私は今ビビンバフである”といつてあります。ビビンバフというのは、韓国料理のませご飯のことですが、ただおせりいいというものではありません。せ方にコツがあるんです。ヘタにませたら全然美味しいません。あらゆる文化に関心を持ち、それを比較したり、ませたりするのが私の方法論です。私はませるコツだけは人に負けないと、そう申しております。素材さえあれば何でも料理し、食わずにいられない、そういう食欲な胃袋が出来上ったのも、多分私が日本で牛を得、祖国と定住国の二つの文化を持った韓国人だからだろうと思います。

今日は「後期朝鮮王朝の社会制度一作り手と文化遺産」ということでお話をしたいと思います。サブタイトルの“作り手と文化遺産”の、ものを作る人達の世界を知るためににはその社会的背景を知る必要があります。焼きものを始め、ものを作った人々は、現在では人間国宝に相当する人達なんですが、当時は賤民にされていました。同様に、踊りを踊る人、歌を歌う人なども皆賤民でした。そこで、二十世紀に於いて脚光を浴びている彼等の残した文化遺産とその社会制度について少し考えてみたいと思います。また、演題に“後期朝鮮王朝の社会制度”とありますから、後期に限らず話すことをお断り申し上げます。

今日、韓国では「李朝」とはいいません。「朝鮮朝」或いは「朝鮮王朝」といいます。「李朝」というのは、戦前に日本が付けたネーミングですので使いません。朝鮮王朝の前の高麗は、仏教が榮え、すばらしい仏教文化を築きました。当時、儒教は仏教と一緒に、既に三國時代に入ってきておりましたが、主として行政面に浸透し、思想面は仏教が支配しておりました。ところが、高麗王朝の末期になると仏教は退廃化し、代って儒教が、國を憂うる人々の心を引き付け、そこから多くの若い学者が世に出ました。彼らと一緒に高麗を倒し、新しく朝鮮王朝を建てたのが太祖・李成桂です。1392年のことです。それ故に、同朝は儒教を國教に定めたといわれる由縁です。同朝は排仏抑儒政策をとり、仏教を弾圧し、僧侶をも賤民にしますが、建国より100年位の間は、王もお守護をしてあります。ハングルを作成した世宗大王は、仏典のハングル訳を命じています。

ここで政治体制について、高麗と朝鮮王朝との違いを簡単に述べてみましょう。前者は宗教的にいいますと仏教を國教とした

お坊さんを中心とする貴族社会を、後者は儒教を國家の基本理念とし、両班を中心とする官僚社会を形成したように、両者には違いがはつきりと出ています。また、前者は地方分権的で、郷や部曲という特定の差別地域をコントロールする地方権力者（地方の豪族）がありました。後者になると中央集権化が図られ、全てがソウル（王都）でコントロールされるようになつた為に官僚（支配者）が強くなり、これらに隸属する賤民層が出来上りました。1470年に颁布・施行された『経国大典』（今日の六法全書）により國の基本法が定まり、佛教が名実ともに王朝の理念として確立すると共に、人々の身分をも固定化しました。

次いで階級制度を見てみると、両班・常民・賤民と三階層に分けられます。両班というのは、東の班と西の班、即ち、両方の班の意で、東班は文官、西班は武官を指し支配者層を形成します。文官は武官よりも優位に立ち、国防大臣のような軍関係の長の席をも独占し、完全なシビリアン・コントロールの体制がとられます。文官の子供のみが父の職を継ぐための受験資格が与えられました。一方、武官の方は、両班でない普通の平民でも試験を受けることが許されました。戦うための兵隊は、頭よりも力に重点が置かれたからでしょう。この両班と常民の中間に位置する身分に中人がありました。中人とは、通訳、医学、法律などの技術系官職に従事した、今でいうテクノクラートをいいいます。この中人をも含めてこれらを広義に両班といいます。両班に対応する形で常民（常人ともいいます）があり、農業、工業、商業などに従事する平民達が主でした。中でも農民が大部分を占めていたので、普通常民といえば農民をさします。工業と商業に従事する人は、常民と賤民の間を行ったり来たりしています。儒教思想からいいますと、ものの作り手（匠）は、常民の中に入れないので、商人も同様です。また、前朝の貴族であったお坊さんは、一転して賤民に落ちてしまいました。

次に厳しい差別に苦しめられ、社会の最下層に属した賤民についてお話をします。賤民とは何かを一律に規定することには問題がありますが、一般的に宮廷の門番、伝令、召駕官の人夫、烽火台でのろしをあげる人、水先案内等公的機関の下で働く賤民は公賤と呼ばれ、賤民の中でも上位に属します。この公賤に対して両班など支配者に召使われた私賤があります。また“八賤”といつて特定の職業に固定され、蔑視された人々がいます。白丁といつ



スライド①

密陽百中戲



スライド②

農業

て屠殺業や柳ごうりなどを作る人、工芸品等を作る匠人、芸人の広大（才人ともいいう）、ムーダン（巫女）やパクス（巫巫）などのシャーマン、妓生（芸妓）、野辺辺りに従事する表裏クン、最下層に落された僧尼、自由に売買された奴婢等がそれです。かれらの職業は世襲で、朝鮮王朝500年もの長い間続きました。如何にひどいものであったかご理解頂けると思います。しかし、最近ではこれらの人々が妬い育んできた芸や技術を受継ぐ方が人間国宝に指定されるようになっています。

韓国の伝統文化は、宮廷・常民・賤民文化の大きく三つに分類されます。宮廷芸術には雅楽や舞踏（これを呈才といいます）など、があります。常民芸術では、農業や仮面劇などが代表的なものでしょう。さらに、民謡があります。賤民文化には、広大の残した芸や技、それからムーダン達が残した歌謡と盆舞、さらに野辺辺りの免歌などがあります。

次には色、つまり韓国の色について少し話してみましょう。韓民族のことを白衣民族とも言うように白を好みます。焼きものでいえば白磁、とくに朝鮮王朝の白磁は有名ですが、白磁の壺の縁、磁肌を包んでいるあの線、流線が特徴的です。柳宗悦は白磁の白や壺を縁取る曲線の線を朝鮮の美的生命としてとらえ、絶賛のごとばを惜しみなく贈りました。かれが心酔していたイギリスの詩人ブレイクは物の美しさを「形と線」にあるという名言を残していますが、柳宗悦はそれを朝鮮半島の白磁を中心とする焼き物にみたのです。発見したのです。そこからその心を洞察して「朝鮮の美は凡て悲哀の美だ」という定言を生みました。悲哀の美とは大変な誤認でした。宗悦は、朝鮮の細く長い曲線の心は、生活苦に喘ぎ、安らぎを失った民の哀しい心中を吐き出した心の音だと見ていたのです。先程テープでお聞き頂きました農作業の歌の、あの細く長いソリ（音や声のこと）はまさに宗悦のいうところの細く長い曲線でしょう。しかし、あの種のソリは韓国民謡の大きな特徴ですが泣き声、哀しみの声ではないのです。あのソリを思いつきり体の外へ吐き出すと、吐き出した当人はさわやかな気持ちになり、生を悦び、楽しんでいます。

さて、白は韓国のシンボルカラーですが、もう一つシンボルカラーアリあります。五色（青・朱・白・黒・黄）です。それに白も絹の白、木綿の白、麻布の白といったように複数の白があります。スライドをご覧頂きましょう。（スライド投影）

スライド①

これは慶尚南道密陽で撮影した密陽百中戲です。中央の人物